

# 思い込み態度尺度構成の試み

## An attempt to construct a scale of prejudiced impressions

田 村 圭 佑

(和歌山大学大学院教育学研究科)

Keisuke Tamura

米 澤 好 史

(和歌山大学教育学部心理学教室)

Yoshifumi Yonezawa

2005年10月7日受理

### はじめに

現在私たちの生活の上で占いはよく見かけられる。その種類も星占い、血液型占いや風水占いなど豊富であり、TVだけに限らず、雑誌にもよく取り上げられ、果てには占い専門のものまである。血液型性格判断も今や性格の理論としてよく知られTV番組でもよく取り上げられ、「血液型によって良し悪しがあり、いじめなどの問題となる」から番組を控えるようにという申し入れが起こったほどである。心理学においては、血液型と性格の関連は認められないというのが常識だが、日常会話の中でもほぼ当たり前のように血液型による性格や相性が話題とされるようになっている。これら占いというものは科学的根拠がなく、正しいかどうかは分からないものである。それにも関わらずこれだけ浸透しているのは、人々がそれを信じて、思い込んでいるからである。このように私たちの生活の中には思い込みというものが沢山ある。占いの他にも超能力や超常現象、霊やUFOの存在など例には事欠かない。そしてこうした思い込みが起す弊害もまた多い。先に述べた血液型性格判断は、例の中で挙げたようにそれのみで人の性格を決めつけてしまい、過度になるとその人に対し偏見や差別意識を抱くことにもなりかねない。思い込みによる弊害にはさらに大規模なものもある。動物園ではわりとよく見かけられることができる動物であるサイは、今絶滅の危機に瀕している。これは人間文化の侵略に伴い乱獲されたからであるが、サイが狙われた理由はその立派な角にある。この角を闇市場で売るために多くのサイが密猟されたのだ。このサイの角は、極東アジアにおいて細かく砕いて粉末にしたものが解熱薬、頭痛薬になると誤った信念があり、そのため高額で取引されたからである (Gilovich, 1993)。このような弊害を見ていくと誤信念を思い込んでしまっていることの恐ろしさに気付くであろう。こうした弊害による被害に遭わないために、誤信念などの思い込みを排除し、正しい判断に基づいて世の中を見ていくことが必要になってくる。

非科学的なものに対する思い込みの研究はこれまで

成されてきている。伊藤 (1995) は「非科学的なことから」「俗信」と総称し、それらを「超自然的なことから」「占い」「血液型性格判断」などに分類し、それらがどう捉えられているかについて研究を行っている。菊池 (1998) は超常現象を簡単に信じてしまう心理的な情報処理過程に焦点を当て、その要因と構造について視覚や記憶などの誤った認知や推論におけるバイアスなどを用いて説明している。しかし思い込みは非科学的なものに対するものだけではとどまらない。それは私たちの日常生活の中のもっと身近なものにも存在している。「あの人は思い込みが激しい」と言った時、その人物が必ず非科学的なものを信じているとは限らない。「私は嫌われている」と思う、心配性な人を指すこともあれば、「自分はカッコいい」と思う、自信家な人を指すこともある。一言に思い込みといっても様々な対象があり、何を思い込みの対象にするかは個人によって違ってくるのである。さきに述べた非科学的なものを対象とする思い込みと身近にある思い込みとは異質なものであるはずで、それを一般的にはどう捉えられているかを知ることは重要である。また思い込みの度合いというものも人によって変わってくるはずである。思い込みを探っていく上で、何を思い込みと捉えているか、どの程度思い込んでいるかということとは重要であると考えられる。

思い込みというものは認知の欠陥から生じるために認知されにくい。つまり思い込んでいる当人はそれを思い込みだと気づきにくいということだ。しかし当人以外はそれを思い込みであると認知しやすい。他人の思い込みには気づきやすいのである。例えばAさんとBさんがいたとする。Aさんは幽霊の存在を信じており、Bさんは超能力を信じている。Aさんは「超能力などインチキだ。」とBさんを批判し、Bさんは「幽霊なんか幻覚だ。」とAさんを批判する。このようなことは日常生活でもあるのではないだろうか。現に血液型性格を信じる信じないと占いを信じる信じないは無関係であることを示したデータもある (米澤, 2002)。ここからわかることは、その内容が真実であるかどうか

かっていないことでも、自分が信じているものは真実であり、自分の信じていないことは否定し、思い込みだと思ってしまうということである。思い込みだと判断した場合はその内容に対し批判的な態度を持ちそれにとらわれたいと考えることができる。批判的思考 (critical thinking) は近年情報化していく社会の中で適切な情報を取捨選択するために必要であるといわれている。批判的思考とは、自分の推論過程を意識的に吟味する反省的な思考であり、何を信じ、主張し、行動するか決定に焦点を当てる思考である。平山ら (2004) は批判的思考態度によって、信念バイアスを回避できると示している。この信念バイアスは論理の妥当性ではなく、結論が自分の信念と一致しているかどうかによって、結論の妥当性を判断するバイアスのことで、信じること、思い込むことによって生じる思考の弊害である。批判的な思考態度を持って信念バイアスを回避するということは、思い込みを批判してその弊害を排除するということである。つまり思い込みを批判的に見るということは、それを信じるということの裏返しであるといえることができる。言い換えれば信じること=思い込みと捉えているということである。しかし必ずしもそうなるとは言いきれない。法律や社会規範などは信じていても思い込みとはいえない。この場合は信じる=思い込むという図式は描けない。また信じることと思い込むことが同時に存在することもありうる。例えば星占いをTVや雑誌で見ている人が多い。しかし見ている人すべての人が星占いを信じているとは限られない。信じてはいないがなんとなく見てしまう人もいるし、思い込みだと思っていても悪いことが出ていたら気にしてしまう人もいる。他にも霊柩車を見たら親指を隠さないと悪いことが起きるということに対しても迷信だとわかっているけれど、指を隠してしまうという人もいる。これらは思い込みだとわかっているにも関わらず、信じてしまっているパターンである。つまり思い込むことと信じることは必ずしも対極に表れるとは限らないということであり、批判的思考の側面からだけでは思い込みを捉えていくのは難しいと考えられる。信じるということ、つまり物事を肯定的に捉える方の側面からも捉えていくことが必要だと考えられる。思い込みだと判断することと信じるということを別として考えていく必要があるということである。

思い込みには様々な対象があり、何を思い込みの対象とするかは個人によって違ってくことは先に述べたが、この違いは一体どこから生まれてくるのだろうか。「思い込みの激しい人物」というときには心配性な人も自信過剰な人もそれに含まれている。しかしこの2つの性格は反対といってもいい。心配性な人は他人の言動を気にし、それを思い込みの対象とし、一方自身過剰な人は自分の考えを信じ、それが思い込みの対

象となる。思い込みの対象を決める要素の一つとしてその当人のパーソナリティが影響を与えているということである。詫摩・松井らは血液型によって性格が異なるという信念を血液型ステレオタイプと命名し、血液型ステレオタイプを持つ人は持たない人に比べて親和欲求、追従欲求、回帰性傾向、社会的外向性が高いとしている (詫摩・松井, 1985)。これらのパーソナリティは対人場面に見られるものであり、対人関係の築き方の影響は強いものと考えられる。他人の言うことを信じるか信じないかは対人関係の築き方によって変化するということである。しかし自信過剰な人物の場合は、他人よりも自分をどう捉えているのかということのほうが重要になってくる。自信過剰な人は大抵の場合、他人より自分の考えを採用するからだ。このように他人に重点を置くか自分に重点を置くかは大切な要素であると考えられる。また思い込みと判断するかどうかというのは思考態度であるが、物事に対する関わり方も考慮に入れる必要がある。先に述べた批判的思考態度は物事を判断するときに何を信じるか、自分の推論の過程を吟味する思考であり、思い込みと判断するかどうかにも影響を及ぼすだろう。物事を対象として捉え、それらの対象への態度も見えていく。本研究では思い込みに影響するパーソナリティを捉える上で、自己、他人、対象という大きく分けて3つの領域から考えていく。

## 研究1 思い込み態度尺度の構成

### 目 的

本研究では非科学的なものを対象とする思い込みを迷信とし、それら以外の生活の中で埋もれている思い込みを抽出し、尺度化することを目的とする。また思い込みと判断することと、それを信じることの関係性についても検討する。

### 方 法

**被験者** 和歌山大学の学生で男女188名。そのうち記入もれがあった10名と、記入の仕方が明らかに異常であると判断した1名を除いた177名 (男性71名、女性106名) を分析の対象とした。

**材料** 迷信、生活、性役割、文化、社会規範、不合理な信念 (irrational beliefs) の項目群を設定した。迷信は非科学的なものを対象とした思い込みの項目で、伊藤 (1995) の分類を参考に11項目を作成した。生活は日常生活の中で起こりやすいものを対象とするため事前に予備調査として身近な思い込みとして収集していたものから24項目を選んだ。性役割は伊藤 (1997) の性差観スケールから抜き出したものに加え独自の項目と合わせて10項目とした。文化は独自のものを6項目作成した。社会規範は吉田ら (1999) の迷惑認知尺度から抜き出したものに独自のものを加えて12項目とした。不合理な信念は松村 (1991) の日本版Irrational

Belief Testから10項目を抜き出した。計73項目を選び、項目の内容に対し、思い込みと判断するかどうか、と、そう思っている（信じている）かどうかの2種の問い方をし、全146項目と自由記述1問から成る質問紙を作成し用いた。

**手続き** 講義中に質問紙を配布し実施したもの(173名)、各自に渡し後日回収したもの(4名)である。回答は思い込みと判断するかどうかに対しては「思い込みだと思う」「やや思い込みだと思う」「どちらともいえない」「あまり思い込みだと思わない」「思い込みだと思わない」の5件法で回答を求め、そう思うかどうかに対しては「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「そう思わない」の5件法で求めた。

## 結 果

### 因子分析

思い込みと判断するということはその内容に対して批判的と判断していると考えられるので批判的判断と

した。自分がそう思うということはその内容に対して肯定的と判断していると考えられるので肯定的判断とした。批判的項目、肯定的項目のそれぞれについて主因子法を用いて探索的因子分析を行った。因子数は、固有値の変動および解釈可能性より判断し、批判的、肯定的ともに3因子とした。そして批判的判断項目(a項目)、肯定的判断項目(b項目)においてそれぞれプロマックス回転を行った。そして負荷量が.3未満および複数因子に負荷しているものを除外し、その上で批判的、肯定的の両項目に共通の項目のみを抽出し、各因子の項目とした(TABLE 1, 2)。第1因子は「星占いは当たる」や「たたりや呪いは存在する」などの超常現象や俗信といったもので構成されているので「迷信」とした。第2因子は「女の子はおしとやかでなければならない」や「男の子は泣いてはいけない」などの男女の性役割に関するもの、「スーパーマーケットで売っているものはそれほど品質のいいものではない」や「勘定は食事に誘ったほうが払うべきだ」など身近

TABLE 1 思い込み批判的判断の因子負荷量

項 目	I	II	III	共通性
a26「たたり」「呪い」は存在する	.759	-.278	.071	.531
a46超能力は存在する	.638	-.271	-.027	.361
a55星占いは当たる	.630	-.030	-.235	.387
a39厄年には何か悪いことが起こる	.607	.109	.078	.450
a13祈祷やおまじないは効果がある	.605	-.087	.053	.351
a62死んでも魂は残る	.593	-.178	.051	.324
a32霊柩車を見たら親指をかくさないといけない	.529	.006	-.192	.281
70夜に口笛を吹くとへびが寄ってくる	.475	-.016	-.174	.221
a11女の子はおしとやかでなければならない	-.002	.557	-.085	.305
a20スーパーマーケットで売っているものはそれほど品質のいいものではない	-.039	.490	.013	.230
a29男の子は泣いてはいけない	.101	.476	.008	.271
a61赤い服を着ている人は目立ちがりやだ	.056	.472	.029	.248
a6私は欠点のない人間でなければならない	-.100	.450	-.117	.188
a4左手でお酒をついではいけない	-.201	.446	.032	.181
a58子育てはやはり母親でなくてはと思う	.017	.445	.032	.208
a42女性は男性に比べ、手先が器用である	.112	.426	.021	.230
a23女の子は家の手伝いをたくさんするべきだ	.079	.422	.164	.255
a2犬を飼っている人は寂しがりやだ	-.066	.418	-.062	.160
a22青い包装紙は悲しみを表すので使うべきではない	.057	.387	-.199	.184
a36勘定は食事に誘ったほうが払うべきだ	.086	.383	-.053	.172
a5男の子はむやみに弱音を吐くものではない	.192	.369	.058	.233
a19いつも人が私を悩ませる	.070	.343	-.112	.139
a30割り勘を好む人はお金に細かい	.266	.336	.121	.280
a16デート代は男が出すべきだ	.174	.311	-.034	.160
a65並んで電車やバスを待っている人たちの横から割り込んではいけない	-.096	-.166	.623	.389
a52重罪を犯した人は厳しく罰せられて当然だ	.025	.029	.618	.394
a21図書館で声の大きさを気にしないでしゃべるのはいけない	-.146	-.072	.601	.352
a72待ち合わせの時間はきちんと守るべきだ	-.015	-.222	.581	.355
a54目上の人に対しては敬語を使うべきだ	.018	.108	.546	.329
a44路上に噛んだガムを捨ててはいけない	-.108	.011	.524	.266
a41相手の話を聞くときは相槌をうつべきだ	.092	.114	.412	.223
a28車のエンジンをかけたまま駐車してはいけない	-.120	-.013	.370	.135
a64寝るときにお腹に布団をかけないと風邪をひく	.260	.044	.370	.253
a15強い香りの香水や整髪剤をたくさんつけて、電車やバスに乗ってはいけない	-.264	.240	.328	.180
固有値	7.52	4.25	3.35	
寄与率(%)	10.30	5.82	4.59	20.70

TABLE 2 思い込み肯定的判断の因子負荷量

項 目	I	II	III	共通性
b29男の子は泣いてはいけない	.686	-.140	.039	.438
b6私は欠点のない人間でなければならない	.534	-.194	.029	.259
b16デート代は男が出すべきだ	.513	-.039	-.073	.239
b5男の子はむやみに弱音を吐くものではない	.501	.063	.011	.280
b61赤い服を着ている人は目立ちたがりやだ	.487	.012	-.006	.240
b22青い包装紙は悲しみを表すので使うべきではない	.455	.090	-.184	.224
b36勘定は食事に誘ったほうが払うべきだ	.450	.007	-.172	.194
b58子育てはやはり母親でなくてはと思う	.447	-.010	.093	.227
b11女の子はおしとやかでなければならない	.417	-.127	-.007	.154
b23女の子は家の手伝いをたくさんするべきだ	.404	.021	.098	.201
b42女性は男性に比べ、手先が器用である	.367	.048	-.007	.147
b19いつも人が私を悩ませる	.366	-.045	.009	.126
b4左手でお酒をついではいけない	.363	.002	.030	.138
b2犬を飼っている人は寂しがりやだ	.352	.060	-.134	.130
b30割り勘を好む人はお金に細かい	.344	.081	.101	.177
b20スーパーマーケットで売っているものはそれほど品質のいいものではない	.326	.023	-.061	.104
b26「たたり」「呪い」は存在する	-.229	.731	.077	.507
b46超能力は存在する	-.164	.634	-.063	.345
b62死んでも魂は残る	-.124	.570	.023	.301
b55星占いは当たる	.078	.563	-.094	.326
b13祈祷やおまじないは効果がある	.093	.558	.000	.355
b70夜に口笛を吹くとへびが寄ってくる	.040	.498	-.076	.244
b32霊柩車を見たら親指をかくさないといけない	.042	.406	.042	.191
b39厄年には何か悪いことが起こる	.254	.373	.144	.338
b44路上に噛んだガムを捨ててはいけない	-.295	.020	.568	.327
b21図書館で声の大きさを気にしないでしゃべるのはいけない	-.175	-.125	.553	.276
b54目上の人に対しては敬語を使うべきだ	.043	-.103	.497	.237
b15強い香りの香水や整髪剤をたくさんつけて、電車やバスに乗ってはいけない	.053	-.155	.474	.215
b52重罪を犯した人は厳しく罰せられて当然だ	-.063	.122	.465	.250
b41相手の話を聞くとときは相槌をうつべきだ	.129	.010	.401	.208
b64寝るときにお腹に布団をかけないと風邪をひく	-.083	.202	.335	.175
b72待ち合わせの時間はきちんと守るべきだ	-.208	-.135	.332	.128
b28車のエンジンをかけたまま駐車してはいけない	.100	-.013	.320	.125
固有値	7.89	3.16	2.44	
寄与率(%)	10.81	4.33	3.35	18.48

な生活の中で見られるものが多く、習慣的なものだと  
いえるので「習慣」とした。第3因子は「図書館で声  
の大きさを気にしないでしゃべるのはいけない」や「待  
ち合わせの時間はきちんと守るべきだ」などいわゆる  
マナー的なもの社会規範であるものであるので「規範」  
とした。

各因子の信頼性を検討するため、 $\alpha$ 係数を算出した  
結果、迷信因子の批判的判断の $\alpha = .809$ 、肯定的判断の  
 $\alpha = .775$ 、習慣因子の批判的判断の $\alpha = .802$ 、肯定的判  
断の $\alpha = .796$ 、規範因子の批判的判断の $\alpha = .711$ 、肯定  
的判断の $\alpha = .644$ であった。

次に各因子の項目得点合計の平均値を算出し  
(TABLE 3)、批判的判断と肯定的判断においてt検  
定を行ったところ、迷信批判的判断が迷信肯定的判断  
より有意に高かった[t(176)=9.62,  $p < .01$ ]。習慣批  
判的判断が習慣肯定的判断より有意に高かった[t  
(176)=19.11,  $p < .01$ ]。規範肯定的が規範批判的判  
断より有意に高かった[t(176)=34.05]。

TABLE 3 各因子の尺度得点の平均値と標準偏差

	N	平均値	S D
迷信批判的判断	177	30.4	6.64
習慣批判的判断	177	61.9	10.2
規範批判的判断	177	16.1	5.47
迷信肯定的判断	177	21.7	6.66
習慣肯定的判断	177	35.6	9.75
規範肯定的判断	177	38.8	4.39

TABLE 4 思い込み批判的判断、肯定的判断の評定得点の  
平均値と標準偏差

	N	平均値	S D
迷信批判的判断	177	3.81	0.83
習慣批判的判断	177	3.87	0.64
規範批判的判断	177	1.79	0.61
迷信肯定的判断	177	2.72	0.83
習慣肯定的判断	177	2.22	0.61
規範肯定的判断	177	4.31	0.49

TABLE 5 各因子の相関

	迷信批判的判断	習慣批判的判断	規範批判的判断	迷信肯定的判断	習慣肯定的判断	規範肯定的判断
迷信批判的判断		.204**	.090	-.636**	-.103	-.114
習慣批判的判断			.125	-.221**	-.692**	-.077
規範批判的判断				-.130	-.023	-.614**
迷信肯定的判断					.233**	.185*
習慣肯定的判断						.095
規範肯定的判断						

\* =  $p < .05$  \*\* =  $p < .01$

さらに各因子の尺度得点の平均評定得点を算出し (TABLE 4)、思い込み批判的判断、思い込み肯定的判断のそれぞれにおいて分散分析を行った結果、思い込み批判的判断は  $[F(2, 528) = 509.68, p < .01]$  で有意差があった。Scheffe法による下位分析を行ったところ、迷信、習慣には有意差が見られず、規範は迷信、習慣よりも有意に低かった。思い込み肯定的判断は  $[F(2, 528) = 483.94, p < .01]$  で有意差があった。Scheffe法による下位分析を行ったところ、迷信、習慣、規範のすべてに有意差が見られた。

#### 相関分析

各因子の関係性を検討するために相関分析を行った (TABLE 5)。迷信批判的判断と習慣批判的判断、迷信肯定的判断と習慣肯定的判断、迷信肯定的判断と規範肯定的判断に有意な正の相関が見られた。迷信批判的判断と迷信肯定的判断、習慣批判的判断と迷信肯定的判断、習慣批判的判断と習慣肯定的判断、規範批判的判断と規範肯定的判断に有意な負の相関が見られた。

#### 考 察

因子については、迷信、習慣、規範が別々に抽出されたことから迷信＝非科学的なものに対する思い込みとそれ以外の思い込みは区別されること、そして規範というものもそれらとは別に明確に存在していることがわかった。習慣因子はより身近な生活の中の思い込みとしての解釈ではあるが、項目作成の際の生活項目、性役割項目、文化項目、Irrational Beliefs項目の全てを含んでおり、雑多な思い込みとしてまとめられている感じが強いので、より細やかな思い込みの分類をしていくことが必要である。各因子の尺度得点の平均値を見てみると迷信、習慣ともに肯定的判断よりも批判的判断が多いのに対し、規範は批判的判断よりも肯定的判断の方が多い。このことから迷信、習慣は思い込みとしての性質が出ており、規範は思い込みとしての性質を持たず信じていることが普通であるという性質が伺える。評定得点の平均値を見てみると、迷信と習慣は批判的判断においては有意差がないが、肯定的判断においては有意差があり、迷信の方が高くなっている。思い込みという判断としてはどちらも思い込みではあるのだが、迷信は信じられることが習慣よりも高

いことを示している。これは迷信というものはまだ非科学的に解明されていないだけで正しいと信じる人もいるが、習慣に含まれる思い込みというものはそういった余地を残していないために信じる人が少ないということが考えられる。また迷信、習慣に比べ、規範の批判的態度と肯定的態度の差が激しいことから、内容によって個別差が生じる思い込みとは違い、一般的な人間の共通の意識という規範の性質が生きていることが考えられる。

続いて相関についてであるが、批判的判断と肯定的判断との間には負の相関が迷信、習慣、規範のすべてにおいて見られていることから、思い込みであろうが、また思い込みの種類に関わらず、批判的判断を下せば肯定的判断を下しにくく、肯定的判断を下せば批判的判断を下しにくくなるということである。迷信と習慣の間には批判的判断、肯定的判断のそれぞれにおいて正の相関が見られたことから、迷信が習慣のどちらかを批判的に判断した場合はもう一方も批判的に判断し、肯定的に判断した場合はもう一方も肯定的に判断するということである。これは迷信も習慣も同じ思い込みとして判断されることが原因と考えられる。まとめると、社会規範のような共通意識と、思い込みが区別されること、迷信＝非科学的なものを対象とする思い込みとそれ以外のものを対象とする思い込みが区別されるものであることが明確になった。

#### 研究 2 思い込み態度尺度の妥当性の検討

##### 目 的

研究 1 で抽出した思い込み態度尺度と他のパーソナリティ尺度との関連を調べ、尺度の妥当性を検討する。

##### 方 法

**被験者** 和歌山大学の学生男女672名。そのうち記入の仕方が明らかに異常であると判断した5名を除いた667名 (教育学部男性75名、女性113名、経済学部男性161名、女性89名、システム工学部男性184名、女性45名) を分析の対象とした。

**材料** 思い込み態度、自己、他者、対象の領域を設定した。思い込み態度は研究 1 で抽出した項目計33項目を「思い込みと思うかどうか」「そう思うかどうか」の2通りの聞き方をした。自己領域には、自意識尺度

(菅原,1984)全21項目、自己愛人格目録短縮版(小塩,1998)全30項目を用いた。他者領域には、他者意識尺度(辻,1993)全15項目、親和動機尺度(岡島,1988)全23項目、依存欲求尺度(田中,2003)全20項目を用いた。対象領域には認知欲求尺度(神山・藤原,1991)全15項目、知的好奇心尺度(桜井・下山・黒田,2004)全21項目、批判的思考尺度(平山・楠見,2004)全30項目を用いた。これらの計208項目から成る質問紙を作成し用いた。

**手続き** 講義中に質問紙を配布し回答を得た。回答は思い込みと判断するかどうかに対しては「思い込みだと思う」「やや思い込みだと思う」「どちらともいえない」「あまり思い込みだと思わない」「思い込みだと思わない」の5件法、そう思うかどうかに対しては「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「そう思わない」の5件法、自意識尺度は「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややあてはまらない」「全くあてはまらない」の5件法、自己愛人格目録短縮版は「とてもよくあてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかというにあてはまらない」「まったくあてはまらない」の5件法、他者意識尺度は「全くそうだ」「そうだ」「どちらともいえない」「ちがう」「全くちがう」の5件法、親和動機尺度は「全くその通りだと思う」「どちらかといえばその通りだと思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばちがう」「全くちがう」の5件法、依存欲求尺度は「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法、認知欲求尺度は「非常にそうである」「そうである」「どちらでもない」「そうでない」「全くそうでない」の5件法、知的好奇心尺度は「よくあてはまる」「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の5件法、批判的思考態度尺度は「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法でそれぞれ回答を求めた。

## 結 果

### 因子分析

それぞれの尺度ごとに主因子法による探索的因子分析を行った。因子数は、固有値の変動および解釈可能性および元の尺度の因子数より判断し、思い込み批判的、思い込み肯定的は3因子とした。プロマックス回転したところ批判的判断、肯定的判断ともに研究1と全く同じ因子構造であったので、迷信、習慣、規範因子とし項目も同じものを用いた。自意識尺度は2因子とし、バリマックス回転したところ元の因子構造と全く同じものとなったため、全ての項目を因子に用いた。第1因子は元の尺度の公的自意識の項目だったので公的自意識とした。第2因子は元の尺度の私的自意識の

項目だったので私的自意識とした。自己愛人格目録短縮版は3因子で、プロマックス回転し因子負荷量.35未満の項目13「私は、人々を従わせられるような偉い人間になりたい」を除外した。第1因子は元の尺度の優越感・有能感に含まれる項目が多かったので、優越感・有能感とした。項目21「いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう」は元の尺度では自己主張性であったが、内容的に齟齬がないと判断し、優越感・有能感で用いた。第2因子は元の尺度の注目・賞賛欲求の項目だったので、注目・賞賛欲求とした。第3因子は元の尺度の自己主張性の項目だったので自己主張性とした。他者意識尺度は3因子で、バリマックス回転したところ、元の尺度の因子構造と同じものとなったので、全ての項目を用いた。第1因子は元の尺度の内的他者意識の項目だったので、内的他者意識とした。第2因子は元の尺度の空想的他者意識の項目だったので、空想的他者意識とした。第3因子は元の尺度の外的他者意識の項目だったので外的他者意識とした。親和動機尺度は4因子で、バリマックス回転し因子負荷量.35未満の項目7「2, 3人の人と非常に親密な友情をもてれば、満足である」、22「私をあまり肯定してくれない人と一緒にいたくない」を除外した。第1因子は元の尺度のポジティブな刺激の項目が多く、積極的な人とのつながりを求める内容のものが多かったので、ポジティブなつながりとした。項目8「私が注目の的になれるときは、人と一緒にいたい」は元の尺度では社会的比較であったが、内容的に齟齬がないと判断し、ポジティブなつながりで用いた。第2因子は元の尺度の注目の項目が多く、自分に加えて人への注目を示す項目も含まれているので注目とした。項目4「仕事で、あるいは、別の場面で自分が何をしてよいのかわからないとき、手がかりとして人をみる」は元の尺度では社会的比較、項目21「いろいろな人と一緒にいて、その人たちについて知ることは興味深い」は元の尺度ではポジティブなつながりであったが、内容的に齟齬がないと判断し、注目として用いた。第3因子は元の尺度の情緒的支持の項目が多かったので、情緒的支持とした。項目19「何が起きているのか解らないとき、自分と同じ経験をしている人と一緒にいたい」は元の尺度では社会的比較、項目17「回りの人が私の存在に気づき、私らしさを認めてくれたらいいと思う」は元の尺度では注目であったが、内容的に齟齬がないと判断し、情緒的支持として用いた。第4因子は元の尺度の社会的比較の項目だったので、社会的比較とした。依存欲求尺度は4因子で、バリマックス回転した。第1因子は元の尺度の相談・コミュニケーションの項目だったので相談・コミュニケーションとした。第2因子は元の尺度の精神的支えの項目が多かったので、精神的支えとした。項目20「Aには、喜びや悲しみを、共に感じてほしい」は元の尺度では相談・コミュニケー

ションであったが、内容的に齟齬がないと判断し、精神的支えで用いた。第3因子は元の尺度の道具的支援の項目が多かったので、道具的支援とした。項目16「Aには、私の身の回りの世話をしてほしい」は元の尺度では精神的支えであったが、内容的に齟齬がないと判断し、道具的支援で用いた。第4因子は元の尺度の指導・アドバイスの項目だったので指導・アドバイスとした。認知欲求尺度は1因子で元の尺度通り全ての項目を用いた。知的好奇心尺度は1因子で因子負荷量.35未満の項目を除外した。また批判的思考態度は妥当性を検討するために、元の尺度の因子構造のものをそのまま論理的思考の自覚、探求心、客観性、証拠の重視として用いた。

各因子の信頼性を検討するため、 $\alpha$ 係数を算出した結果、迷信批判的判断の $\alpha = .799$ 、習慣批判的判断の $\alpha = .797$ 、規範批判的判断の $\alpha = .765$ 、迷信肯定的判断の $\alpha = .804$ 、習慣肯定的判断の $\alpha = .816$ 、規範肯定的判断の $\alpha = .653$ 、公的自意識の $\alpha = .845$ 、私的自意識の $\alpha = .801$ 、優越感・有能感の $\alpha = .889$ 、注目・賞賛欲求の $\alpha = .858$ 、自己主張性の $\alpha = .815$ 、内的他者意識の $\alpha = .839$ 、空想的他者意識の $\alpha = .822$ 、外的他者意識の $\alpha = .717$ 、ポジティブなつながりの $\alpha = .767$ 、注目の $\alpha = .743$ 、情緒的支持の $\alpha = .803$ 、社会的比較の $\alpha = .746$ 、相談・コミュニケーションの $\alpha = .857$ 、精神的支えの $\alpha = .872$ 、道具的支援の $\alpha = .758$ 、指導・アドバイスの $\alpha = .714$ 、認知欲求の $\alpha = .787$ 、知的好奇心の $\alpha = .902$ 、論理的思考の自覚の $\alpha = .794$ 、探求心の $\alpha = .809$ 、客観性の $\alpha = .678$ 、証拠の重視の $\alpha = .457$ であった。

次に各因子の項目得点合計を算出し、男女においてt検定を行った (TABLE 6)。習慣批判的判断 [t (639) = 4.18,  $p < .01$ ]、迷信肯定的判断 [t (656) = 3.64,  $p < .01$ ]、規範肯定的判断 [t (650) = 4.61,  $p < .01$ ]、公的自意識 [t (658) = 2.62,  $p < .01$ ]、外的他者意識 [t (660) = 4.38,  $p < .01$ ]、ポジティブなつながり [t (656) = 3.08,  $p < .01$ ]、注目 [t (655) = 4.62,  $p < .01$ ]、情緒的支持 [t (653) = 6.48,  $p < .01$ ]、相談・コミュニケーション [t (584) = 7.21,  $p < .01$ ]、精神的支え [t (579) = 9.39,  $p < .01$ ]、指導・アドバイス [t (661) = 4.89,  $p < .01$ ]、認知的欲求 [t (652) = 2.45,  $p < .05$ ]、知的好奇心 [t (655) = 2.11,  $p < .05$ ]、探求心 [t (655) = 2.66,  $p < .01$ ]において女性の方が男性より高かった。迷信批判的判断 [t (656) = 2.08,  $p < .05$ ]、規範批判的判断 [t (652) = 2.99,  $p < .01$ ]、習慣肯定的判断 [t (652) = 5.82,  $p < .01$ ]、優越感・有能感 [t (660) = 3.35,  $p < .01$ ]、論理的思考の自覚 [t (656) = 3.12,  $p < .01$ ]、証拠の重視 [t (661) = 3.56,  $p < .01$ ]において男性の方が女性より高かった。

また学部において一元配置分散分析を行った (TABLE 7)。以下に示すのは有意差のあったものの

TABLE 6 各因子合計得点の男女ごとの平均値と標準偏差

	性別	N	平均値	S D
a迷信批判的判断	男	413	30.3	6.77
	女	245	29.2	6.34
a習慣批判的判断	男	399	57.5	9.96
	女	242	61.0	10.50
a規範批判的判断	男	409	19.4	6.59
	女	245	17.8	6.56
b迷信肯定的判断	男	412	19.8	6.81
	女	246	21.8	6.59
b習慣肯定的判断	男	409	40.5	9.83
	女	245	35.8	10.10
b規範肯定的判断	男	407	34.9	5.17
	女	245	36.9	5.20
c公的自意識	男	415	40.7	7.17
	女	245	42.2	7.30
c私的自意識	男	411	34.4	6.74
	女	246	34.8	6.56
d優越感・有能感	男	417	28.6	8.02
	女	245	26.4	7.83
d注目・賞賛欲求	男	413	29.2	7.00
	女	246	29.2	7.29
d自己主張性	男	411	27.0	6.79
	女	243	27.1	6.82
e内的他者意識	男	415	23.1	5.27
	女	246	23.7	5.62
e空想的他者意識	男	417	12.7	3.46
	女	247	12.7	3.92
e外的他者意識	男	415	13.4	3.26
	女	247	14.5	3.13
fポジティブなつながり	男	413	20.2	4.31
	女	245	21.3	4.22
f注目	男	412	23.9	3.82
	女	245	25.2	3.41
f情緒的支持	男	412	25.1	5.04
	女	243	27.7	4.97
f社会的比較	男	418	7.6	1.77
	女	247	7.7	1.70
g相談・コミュニケーション	男	414	18.6	4.81
	女	246	21.1	4.05
g精神的支え	男	416	22.5	6.66
	女	246	27.0	5.69
g道具的支援	男	415	14.9	4.59
	女	246	15.4	4.85
g指導・アドバイス	男	416	12.0	2.52
	女	247	13.0	2.24
h認知欲求	男	411	43.3	8.40
	女	243	44.9	8.34
i知的好奇心	男	414	71.8	11.73
	女	243	73.7	11.27
j論理的思考の自覚	男	413	38.1	7.31
	女	245	36.2	7.45
j探求心	男	411	35.8	6.40
	女	246	37.2	6.58
j客観性	男	412	22.8	4.14
	女	245	23.1	4.41
j証拠の重視	男	416	10.4	2.24
	女	247	9.8	2.26

みである。規範批判的判断は有意 [F (2, 651) = 5.47,  $p < .01$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、経済が教育より有意に高かった。迷信肯定的判断は有意 [F (2, 655) = 6.28,  $p < .01$ ] で、LSD法による下位

検定を行ったところ、システム工学が教育、経済よりも有意に低かった。習慣肯定的判断は有意 [ $F(2,651)=3.75, p<.05$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、経済が教育より有意に高かった。私的自意識は有意 [ $F(2,654)=11.08, p<.01$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、教育が経済、システム工学よりも有意に高かった。内的他者意識は有意 [ $F(2,658)=5.84, p<.01$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、教育が経済、システム工学よりも有意に高かった。ポジティブなつながりは有意 [ $F(2,655)=5.75, p<.01$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ教育がシステム工学より有意に高かった。情緒的支持は有意 [ $F(2,652)=6.41, p<.01$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、教育が経済、システム工学よりも有意に高かった。相談・コミュニケーションは有意 [ $F(2,657)=15.73, p<.01$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、教育が経済、システム工学よりも有意に高かった。精神的支えは有意 [ $F(2,659)=28.89, p<.01$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、教育が経済より、経済がシステム工学より有意に高かった。道具的支援は有意 [ $F(2,658)=7.23, p<.01$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、システム工学が経済、教育より有意に低かった。指導・アドバイスは有意 [ $F(2,660)=4.23, p<.05$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、教育が経済、システム工学よりも有意に高かった。知的好奇心は有意 [ $F(2,654)=4.58, p<.05$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、教育が経済、システム工学よりも有意に高かった。論理的思考の自覚は有意 [ $F(2,655)=4.23, p<.05$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、教育がシステム工学より有意に高かった。探求心は有意 [ $F(2,654)=6.59, p<.01$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、教育が経済、システム工学よりも有意に高かった。客観性は有意 [ $F(2,660)=8.44, p<.01$ ] で、LSD法による下位検定を行ったところ、教育が経済、システム工学よりも有意に高かった。

#### 相関分析

各因子の関係性を調べるために相関分析を行った (TABLE 8)。迷信批判的判断は習慣批判的判断、規範肯定的判断、注目、社会的比較、知的好奇心、証拠の重視との間に有意な正の相関が見られた。また相談・コミュニケーション、精神的支え、道具的支援との間に有意な負の相関が見られた。習慣批判的判断は迷信

TABLE 7 各因子合計得点の男女ごとの平均値と標準偏差

	学部	N	平均値	S D
a迷信批判的判断	教育	185	29.7	6.64
	経済	246	29.5	7.10
	システム工学	227	30.6	6.06

	学部	N	平均値	S D
a習慣批判的判断	教育	178	60.0	10.52
	経済	244	57.9	10.62
	システム工学	219	58.9	9.68
a規範批判的判断	教育	184	17.6	6.13
	経済	247	19.8	7.43
	システム工学	223	18.7	5.88
b迷信肯定的判断	教育	186	21.4	7.16
	経済	248	21.1	7.05
	システム工学	224	19.3	5.99
b習慣肯定的判断	教育	184	37.5	10.63
	経済	247	40.1	10.56
	システム工学	223	38.3	9.19
b規範肯定的判断	教育	185	36.1	5.36
	経済	243	35.1	5.60
	システム工学	224	35.9	4.73
c公的自意識	教育	186	41.9	7.56
	経済	247	40.8	7.49
	システム工学	227	41.1	6.70
c私的自意識	教育	185	36.5	6.39
	経済	248	33.6	6.76
	システム工学	224	34.1	6.50
d優越感・有能感	教育	187	28.4	7.97
	経済	249	28.0	8.63
	システム工学	226	26.9	7.27
d注目・賞賛欲求	教育	187	29.9	7.30
	経済	246	29.4	7.28
	システム工学	226	28.4	6.69
d自己主張性	教育	184	27.7	7.06
	経済	244	27.0	6.91
	システム工学	226	26.4	6.42
e内的他者意識	教育	187	24.4	5.20
	経済	246	23.1	5.45
	システム工学	228	22.6	5.41
e空想的他者意識	教育	186	13.2	3.53
	経済	250	12.6	3.70
	システム工学	228	12.4	3.61
e外的他者意識	教育	186	14.0	3.25
	経済	249	13.8	3.40
	システム工学	227	13.7	3.12
fポジティブ	教育	185	21.4	4.24
	経済	246	20.6	4.31
	システム工学	227	20.0	4.26
f注目	教育	184	24.9	3.79
	経済	245	24.1	3.85
	システム工学	228	24.2	3.52
f情緒的支持	教育	182	27.2	5.47
	経済	246	25.8	5.12
	システム工学	227	25.4	4.83
f社会的比較	教育	187	7.5	1.81
	経済	250	7.6	1.74
	システム工学	228	7.8	1.68
g相談・コミュニケーション	教育	186	21.0	4.29
	経済	248	19.2	4.96
	システム工学	226	18.5	4.44
g精神的支え	教育	186	26.8	5.98
	経済	249	24.1	6.80
	システム工学	227	22.0	6.35
g道具的支援	教育	185	15.9	4.78
	経済	249	15.3	4.91
	システム工学	227	14.2	4.23
g指導・アドバイス	教育	186	12.8	2.46
	経済	249	12.2	2.70
	システム工学	228	12.2	2.14
h認知欲求	教育	183	43.3	9.42
	経済	246	44.4	7.49
	システム工学	225	43.9	8.48



	学部	N	平均値	S D
i知的好奇心	教育	184	74.6	11.78
	経済	249	71.4	10.82
	システム工学	224	72.0	12.09
j論理的思考の自覚	教育	185	38.5	7.66
	経済	250	37.4	7.17
	システム工学	223	36.4	7.37
j探求心	教育	186	37.7	6.28
	経済	246	36.0	6.49
	システム工学	225	35.5	6.53
j客観性	教育	186	24.0	4.38
	経済	248	22.5	3.96
	システム工学	223	22.4	4.29
j証拠の重視	教育	187	10.1	2.45
	経済	249	10.2	2.18
	システム工学	227	10.2	2.20

批判的判断、規範肯定的判断、公的自意識、注目、指導・アドバイス、知的好奇心、探究心、探究心オリジナル、客観性オリジナルとの間に有意な正の相関が見られた。また規範批判的判断、迷信肯定的判断、習慣肯定的判断、優越感・有能感、道具的支援、論理的思考の自覚、論理的思考の自覚オリジナルとの間に有意な負の相関が見られた。規範批判的判断は迷信肯定的判断、習慣肯定的判断、優越感・有能感、自己主張性、空想的他者意識、道具的支援、論理的思考の自覚、論理的思考の自覚オリジナルとの間に有意な正の相関が見られた。また迷信批判的判断、習慣批判的判断、規範肯定的判断、公的自意識、私的自意識、注目、情緒的支持、社会的比較、指導・アドバイス、知的好奇心、探究心、探究心オリジナルとの間に有意な負の相関が見られた。迷信肯定的判断は規範批判的判断、習慣肯定的判断、優越感・有能感、注目・賞賛欲求、自己主張性、内的他者意識、空想的他者意識、外的他者意識、ポジティブなつながり、情緒的支持、相談・コミュニケーション、精神的支援、道具的支援、論理的思考の自覚、論理的思考の自覚オリジナルとの間に有意な正の相関が見られた。また迷信批判的判断、習慣批判的判断、知的好奇心との間に有意な負の相関が見られた。

#### 重回帰分析

各因子が思い込み因子に対してどのような影響を与えているかを調べるために、思い込み尺度の各因子を従属変数とした重回帰分析を行った。

迷信批判的判断では精神的支援、優越感・有能感、空想的他者意識が低く、証拠の重視、注目が高い人ほど迷信に対し批判的になることが示された (FIGURE 1)。

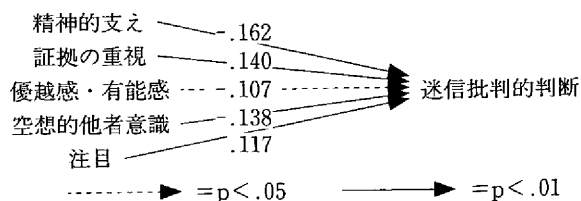


FIGURE 1 迷信批判的判断モデル

習慣批判的判断では優越感・有能感、論理的思考の自覚が低く、自己主張性、公的自意識、客観性が高い人ほど習慣に対し批判的になることが示された (FIGURE 2)。

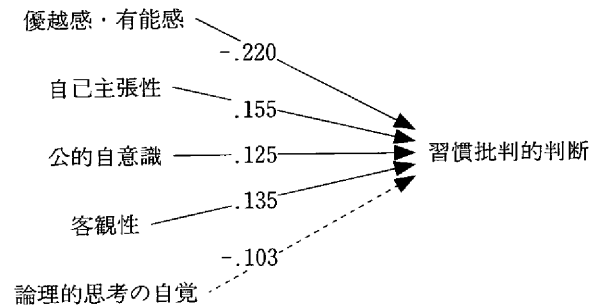


FIGURE 2 習慣批判的判断モデル

規範批判的判断では注目、知的好奇心、公的自意識が低く、優越感・有能感、空想的他者意識、ポジティブなつながり、論理的思考の自覚が高い人ほど規範に対し批判的になることが示された (FIGURE 3)。

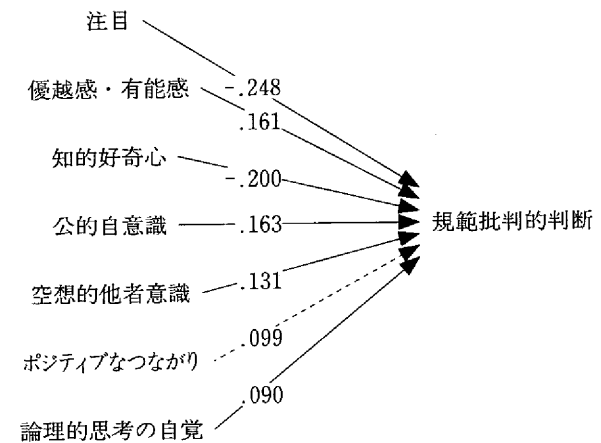


FIGURE 3 規範批判的判断モデル

迷信肯定的判断では証拠の重視、注目が低く、優越感・有能感、外的他者意識、相談・コミュニケーション、空想的他者意識が高い人ほど、迷信に対し肯定的になることが示された (FIGURE 4)。

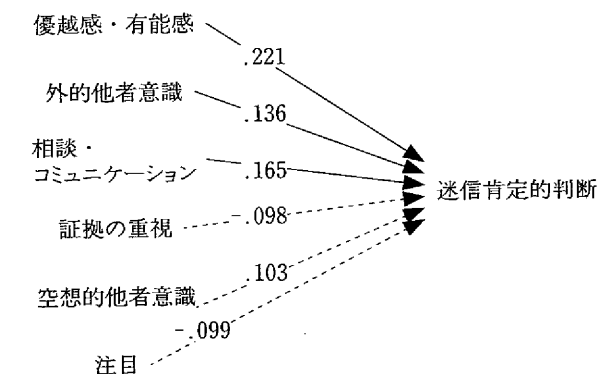


FIGURE 4 迷信肯定的判断モデル

TABLE 8 各因子の相関

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	a	b
A a 迷信批判的		.439**	-.213**	-.555**	-.127**	.169**	.040	.051	-.139**	-.076	-.011	-.055	-.128**	-.076	-.078*	.114**	-.076	.103**	-.109**	-.147**	-.081*	.060	-.035	.126**	-.061	.039	.028	.117**
B b 習慣批判的			-.193**	-.104**	-.408**	.152**	.123**	.070	-.181**	-.059	.004	.016	-.016	.033	.032	.167**	.074	.069	.059	.005	-.096*	.146**	-.017	.160**	-.110**	.112**	.091*	-.007
C c 規範批判的				.163**	.259**	-.487**	-.252**	-.066*	.310**	-.011	.142**	-.008	.078*	-.054	-.037	-.332**	-.139**	-.186**	-.037	.062	.184**	-.171**	.057	-.319**	.179**	-.148**	-.028	.022
D d 迷信肯定的					.387**	-.095	.070	.040	.259**	.233**	.129**	.138**	.193**	.200**	.169**	-.024	.163**	.013	.179**	.202**	.138**	.042	.014	-.089*	.084*	.056	-.045	-.055
E e 習慣肯定的						-.093*	-.050	.016	.393**	.174**	.152**	.054	.084*	.022	.011	-.218**	-.080*	.042	-.029	.030	.220**	-.137**	-.010	-.208**	.178**	-.053	-.141**	.105**
F f 規範肯定的							.221**	.146**	-.208**	-.019	-.038	.022	-.035	.010	.099*	.357**	.140**	.181**	.030	.013	-.087*	.194**	-.121**	.315**	-.132**	.230**	.094*	.087*
G g 公的自意識								.277**	-.074	.408**	-.167**	.360**	.303**	.438**	.295**	.420**	.417**	.415**	.152**	.155**	.042	.146**	-.004	.213**	-.138**	.170**	.001	.067
H h 私的自意識									.023	.133**	.227**	.391**	.265**	.119**	.226**	.302**	.096*	.191**	.092*	.079*	-.008	.208**	-.299**	.366**	.178**	.367**	.378**	.169**
I i 優越感・有能感										.430**	.529**	.207**	.130**	.028	.177**	-.121**	.026	.008	.062	.174**	.229**	-.066	-.160**	-.098*	.465**	.106**	.069	.156**
J j 注目・賞賛欲求											.292**	.302**	.279**	.368**	.388**	.272**	.378**	.273**	.214**	.238**	.158**	.114**	-.099*	.131**	.148**	.260**	-.016	.084*
K k 自己主張性												.186**	.042	-.015	.153**	.032	.006	-.031	.105**	.119**	.075	.103**	-.242**	.109**	.384**	.284**	.155**	.214**
L l 内的他者意識													.540**	.336**	.331**	.300**	.243**	.263**	.251**	.233**	.180**	.238**	-.212**	.219**	.207**	.287**	.247**	.179**
M m 空想的他者意識														.416**	.339**	.269**	.313**	.283**	.214**	.207**	.212**	.115**	-.050	.049	.016	.147**	.037	.029
N n 外的他者意識															.278**	.290**	.324**	.403**	.166**	.163**	.115**	.127**	.113**	.049	-.160**	.106**	-.073	-.044
O o f ポンティフ																.543**	.627**	.231**	.329**	.322**	.205**	.244**	-.064	.203**	.066	.303**	.059	.057
P p 注目																	.545**	.351**	.316**	.243**	.062	.443**	-.090*	.438**	-.046	.396**	.173**	.101**
Q q 情緒的支持																		.223**	.428**	.391**	.238**	.265**	.067	.138**	-.067	.200**	-.027	-.004
R r 社会的比較																			.085*	.047	.069	.133**	.022	.141**	-.125**	.129**	-.082*	.106**
S s 相懸・コミュニケーション																				.628**	.325**	.524**	.058	.100*	.032	.186**	.089*	.030
T t g 精神の支え																					.537**	.429**	.084*	.042	.056	.174**	.067	.006
U u g 道具的支援																						.195**	.098*	-.121**	.068	.052	-.051	.004
V v g 指導・アドバイス																								-.082*	.312**	.004	.371**	.207**
W w h 認知欲求																									-.432**	-.451**	-.294**	-.255**
X x i 知的好奇心																										.180**	.672**	.360**
Y y j 論理的思考の自覚																											.331**	.386**
Z z j 探求心																											.466**	.301**
a a j 客観性																												.224**
b b j 証拠の重視																												

\* =  $p < .05$  \*\* =  $p < .01$

習慣肯定的判断では客観性、注目が低く、優越感・有能感、道具的支援、私的自意識、証拠の重視が高い人ほど習慣に対し肯定的になることが示された (FIGURE 5)。なおこのモデルには自己主張性が含まれていたが、共線性の診断において条件指標が30を超えていたために除去した。

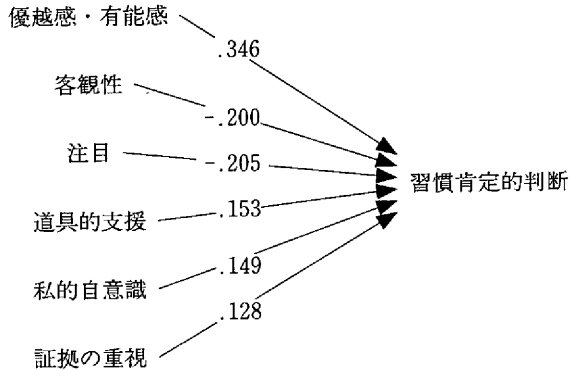


FIGURE 5 習慣肯定的判断モデル

規範肯定的判断では論理的思考の自覚、認知欲求、空想的他者意識、注目・賞賛欲求が低く、注目、知的好奇心、公的自意識が高い人ほど規範に対し肯定的になることが示された (FIGURE 6)。

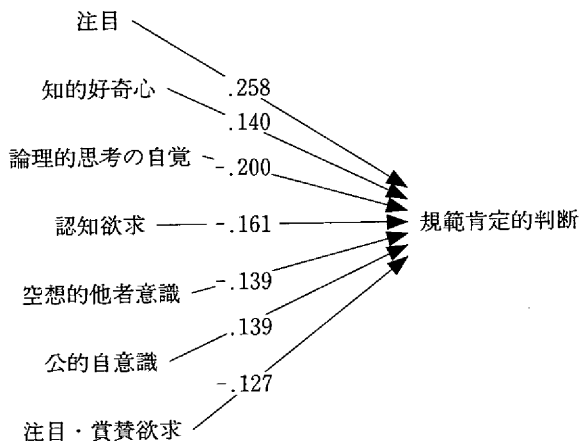


FIGURE 6 規範肯定的判断モデル

## 考 察

因子分析に関しては、研究1と同じ構造の迷信、習慣、規範の因子が抽出され、思い込みの因子としてそれぞれの質の違いの妥当性が示された。男女間では男性が迷信、規範に対し批判的、習慣には肯定的であるのに対し、女性は迷信、規範に対し肯定的で、習慣に対しては批判的という結果が示された。これは女性には迷信に含まれる占いやおまじないといったものを好む人が多いが、男性にはそういったものより科学的なものを好む人が多いことが現れているのと考えられる。また習慣という身近な事柄やマナーといったものには男性より女性の方が敏感であることが習慣的な思い込みに批判的かつ規範には肯定的である結果を生ん

だと考えられる。学部間では経済学部の学生が教育学部の学生より規範に批判的で習慣に肯定的であることが示された。これは経済学部の学生が経済という社会を見ていく視点を持っており、規範というものにも批判的に見てあり方について問うという姿勢があり、習慣といった身近な事柄に関しては教師という教える側の立場を意識する教育学部の学生の姿勢が現れているのではないかと考えられる。また迷信への肯定度はシステム工学の学生が他の2学部より低いことが示されたが、これはシステム工学という理系の学生は科学的なものの見方を重視することで、迷信を安易に信じないことが考えられる。

相関に関しては、思い込み因子同士の相関は研究1とはほぼ同じで批判的判断と肯定的判断はそれぞれ負の相関であり、思い込みだと判断したものは信じがたく、信じたものは思い込みだと思わないことが示された。また迷信と習慣の間には正の相関が見られ、これらが思い込みとしてまとめられて判断されていることが示された。研究1との違いは新たに有意差が見られたものは、迷信批判的判断と習慣肯定的判断との負の相関、規範肯定的判断との正の相関、習慣批判的判断と規範肯定的判断との正の相関、規範批判的判断と迷信肯定的判断、習慣肯定的判断との正の相関、迷信批判的判断、習慣批判的判断との負の相関、習慣肯定的判断と規範肯定的判断との負の相関である。迷信に批判的であれば迷信を信じなくなることに加えて、習慣に対しても信じなくなる傾向が伺え、迷信と習慣の思い込みとしてのまとまりの強さが現れていると言える。また研究1では規範と迷信、習慣とは関連がなかったが、規範に批判的であれば迷信や習慣を信じやすく、規範を信じやすければ迷信や習慣に批判的になる傾向が示された。これは規範というみんなが持っていて当たり前だという共通の事項に対し批判的になることが一種の思い込みと同じであるようにとらえられているからだと考えられる。逆に消えてしまったのが迷信肯定的判断と規範肯定的判断の正の相関で、迷信を信じれば規範も信じるということではなく、上記のように規範は信じていることが普通で、批判的にとらえることが思い込みであると考えられるものだったということだろう。思い込み因子と他の尺度の因子との関連についてであるが、迷信の批判的判断、肯定的判断、習慣の批判的判断、肯定的判断の4つに共通しているのが優越感有能感、道具的支援、知的好奇心で、信じる度合いが強いほど優越感有能感、道具的支援が強く、知的好奇心が低くなり、思い込みだと思えるのが強いほど逆の結果になることが示された。これは思い込みの種類に関わらず、優越感有能感=自分への自信が強いほど、道具的支援=人を当てにするのが強いほど、思い込み度が強くなり、知的好奇心が低いほど、思い込みが強いということだ。迷信の批判的判断、肯定的判断の2

つに共通しているのが空想的他者意識、ポジティブ、相談コミュニケーション、精神的支えで、迷信を信じる度が強いほどこれらも強くなることが示された。迷信を信じやすい人は、他人への空想を働かせていて、実際の・精神的なつながりを求める傾向にあるということだ。また迷信肯定的判断には他に注目・賞賛欲求、内的他者意識、外的他者意識、情緒的支持という他人を意識する内容のものとの間に相関が見られ、迷信を信じることと他人との交流を求めることのつながりが強いことが伺える。習慣の批判的判断、肯定的判断の2つに共通しているのが論理的思考の自覚、指導アドバイス、注目、探求心、客観性で、習慣を信じる度が強いほど、論理的思考の自覚が高くなり、他の指導アドバイス、注目、探求心、客観性が低くなるということが示された。習慣を信じやすい人は他人からの指導を受けたり、自他の関係に注目したり、探求心、客観性にかけるという自己中心的さが影響しているということだ。また習慣肯定的判断には自己主張性、注目・賞賛欲求、空想的他者意識との正の相関が見られたこともこれを示すものだ。習慣批判的判断には公的自意識との正の相関が見られた。これは習慣に対し批判的であるということは公的な自分の立場を意識しているということと関係があることを示している。規範の批判的判断、肯定的判断の2つに共通しているのが、論理的思考の自覚、公的自意識、私的自意識、注目、情緒的支持、社会的比較、指導アドバイス、探求心で、規範を信じる度が強いほど、論理的思考の自覚が低くなり、他の公的自意識、私的自意識、注目、情緒的支持、社会的比較、指導アドバイス、探求心が高くなるということが示された。規範を信じやすい人ほど、論理的思考に自覚がなく、自他ともに自意識、注目意識が強く、他人との比較にも意識があり、情緒的なつながりや指導を求め、探求心もあるということだ。論理的思考の自覚はその名に反して思い込みを信じやすいことと正の相関が多く見られた。これは論理的思考の自覚に含まれている項目は、原著論文で「思考への自信」としてとらわれていたことが原因だと考えられる。つまり思考への自信は、自分勝手な自信であり、優越感・有能感と同じようなとられ方をしたためだと考えられる。

重回帰分析に関してだが、まず迷信から考察していく。迷信批判的判断では優越感・有能感、空想的他者意識があることから、空想的な他者や自己への考えというものを持たず、自他の関係に注目する人ほど迷信への批判が強くなることを示している。また精神的支え、証拠の重視が含まれることから、他者を頼りにせず、証拠を重視する思考の傾向が伺える。迷信肯定的判断では優越感・有能感、外的他者意識、相談・コミュニケーション、注目、空想的他者意識があり、これらに証拠の重視が加わる。証拠や自他の関係への注目を

せず、自分への自信＝有能感と他人の外見や空想に思いをめぐらせ、他人とのコミュニケーションを求める人ほど迷信を信じやすいということだ。習慣批判的判断では優越感・有能感、自己主張性、公的自意識、論理的思考の自覚が含まれていることから、有能感のようなものを持たず、自己の考えを主張できる人ほど習慣に対し、批判的であることが示された。また客観性も含まれ、習慣に対し、批判的であるには客観性を重視する傾向にあることが伺える。習慣肯定的判断では優越感・有能感、道具的支援、注目が含まれていることから、自他の関係に注目せず自分への過剰な自信や他人を頼りにする傾向が強い人ほど習慣を信じやすいことが示された。また証拠の重視が含まれ、証拠を重視する人ほど習慣を信じやすいことがわかる。迷信と比べると、迷信を信じる人は証拠を重視しないのに、習慣を信じる人は逆に証拠を重視する結果となった。これは迷信というものが証拠のない非科学的なものであり、信じるためには証拠の有無を重要視しないことが必要なのに対し、習慣は身近な事柄でそれを信じるために根拠が必要であるという質の違いを明らかにしている。また迷信には他人への意識やコミュニケーションなどが関係しているのに対し、習慣は公的な自己への意識や自己主張性などが関係していることを示すものであり、ここでも迷信と習慣の質的な差異を示している。しかし優越感・有能感は迷信、習慣のどちらにも影響を及ぼしており、優越感や有能感を感じている人は思い込みの種類に関わらず、思い込みやすい人であることがわかる。規範批判的判断では優越感や思考への自信、他者への空想、接触欲求が強く、知的好奇心や自他への注目、意識が低い人ほど規範を批判的にとらえる傾向にあることがわかる。規範を批判的にとらえるということは、自他への関心が低く周りのルールなどより自分への思い入れが強いことということであり、この傾向が示された。規範肯定的判断では優越感や思考への自信、他者への空想、接触欲求、賞賛欲求が低く、知的好奇心や自他への注目、意識が高い人ほど規範を重んじる傾向があることが示された。しかし認知欲求が低いと規範肯定度が低くなることは、規範という周りと共通の意識に従い、自分で考えることを放棄する傾向にあることも示していることは見逃せない。これに関しては今後も深めていく必要があるだろう。

まとめると、迷信は他人とのつながりに依存したい気持ちの影響が強く、習慣は「他者から見た自己」という他との関係性に注意できているかどうかの影響が強いことから迷信と習慣は同じ思い込みでも影響する意識が異なり、質の違いを表している。また規範は自意識をはじめ、より自己を中心にした他との関係性を重視しているかどうかの影響が強い。一方、迷信と規範のつながりが薄いのに対し、習慣は規範とのつなが

りがあることから、習慣は思い込みでも規範と似たような思考の末にできる可能性を示唆している。これらのことは自己への関心や他人への関心など、何を意識の重点に置いているかというパーソナリティの違いが思い込みの対象にも影響を及ぼすことを示唆している。

今後の展望としては、より深い思い込みの構造を明らかにしていくとともに、その位置づけを明確にしていきたい。

#### 引用文献

- Gilovich, T. 1993 守一雄・守秀子 (訳) 人間この信じやすきもの—迷信・誤信はどうして生まれるのか— 新曜社.
- 平山るみ・楠見 孝 2004 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響—証拠評価と結論生成課題を用いての検討— 教育心理学研究, 52, 186-198.
- 伊藤哲司 1995 「俗信を信じる」ということ 茨城大学人文学部紀要人文学部, 28, 25-56.
- 伊藤裕子 1997 高校生における性差観の形成環境と性役割選択—性差観スケール (SGC) 作成の試み— 教育心理学研究, 45, 396-404.
- 神山貴弥・藤原武弘 1991 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, 6, 184-192.
- 菊地 聡 1998 超常現象をなぜ信じるのか—思い込みを生む

「体験」のあやうさ— 講談社.

- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 松村千賀子 1991 日本版 Irrational Belief Test (JIBT) 開発に関する研究 心理学研究, 62 (2), 106-113.
- 村元美代・渡辺雄二・青木 宏 1996 おいしさおよび食選択に影響をおよぼす「思い込み」の効果 大妻女子大学紀要家政系, 32, 61-74.
- 岡島京子 1998 親和動機測定尺度の作成 教育心理学会第30回大会発表論文集, 864-865.
- 桜井茂男・下山晃司・黒田祐二 2004 大学生における内発的動機付けの測定に関する予備的研究 日本心理学会第68回大会発表論文集, 903.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 詫摩武俊・松井 豊 1985 血液型ステレオタイプについて 東京都立大学人文学部人文学報, 172, 15-30.
- 田中 優 2003 依存欲求尺度の作成、および、信頼性と妥当性の検討 大妻女子大学人間関係学部紀要, 4, 229-239.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房.
- 米澤好史 2002 論理的思考力と非科学的信念—学力低下論を批判する— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 12, 75-88.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森 久美子・石田靖彦・北折充隆 1999 社会的迷惑に関する研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 53-73.